

まえがき

著者	佐藤 幸人
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	589
雑誌名	アジアの産業発展と技術者
ページ	[i]-iii
発行年	2010
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00011464

まえがき

本書はアジア経済研究所が2008年度から2009年度にかけて実施した「技術者と産業発展」研究会の成果である。研究会の主査は佐藤幸人がつとめ、2008年度の幹事は安倍誠が、2009年度は鈴木有理佳がつとめた。

本書はささやかな冒険の書である。研究会が立ち上がった時点において、明確なゴールがあったわけではなかったからである。

研究会の企画は、佐藤がその前著、『台湾ハイテク産業の生成と発展』（岩波書店 2007年）において展開した議論が、より広く適用できるかどうかを探りたいという思いからスタートした。『台湾ハイテク産業の生成と発展』は、台湾の半導体産業とパソコン産業が技術者たちのどのような戦略から生み出され、世界のなかで重要な位置を占めるまで発展したかを論じていた。幸いなことに、東アジアおよび東南アジアの産業発展を考えるうえで、技術者の役割が鍵となるという発想は、本書の他の著者たちの共感を得、研究会を組織することになった。

しかしながら、序章でも述べているように、技術者に着目して産業発展を考察するというアプローチにはお手本となるような先行研究がない。達成すべきゴールは自ら定めるしかない。こうして研究会の先行きへの不安はこれまで以上に大きなものになった。自分自身を含めメンバーは一定の水準以上の研究成果を創り出すことができるのだろうか、それは一冊の本となるようなまとまりを持ったものになるのだろうか、ひやひやしながらの2年あまりだった。とりわけ、アジア経済研究所にも成果主義が導入され、2年間の研究会活動はそれなりの成果を生んで当たり前、生まなければ減点に直結する。成果の輪郭がおぼろな研究に取り組むことは「冒険」なのである。

それ故、今、こうして本書を上梓するに至り、ほっとしている。同時に、

本書の到達点が2年間でできることにとどまった感も否めない。その意味で冒険は「ささやかな」ものである。しかし、技術者を軸に分析するというアプローチは、本来、大きなポテンシャルを持っている。本書でもそれは垣間見ることができる。今後、この可能性を大きく開花させていかなければいけないと思っている。

冒険に出発するにあたり、わたしたちはいくつかの工夫をおこない、それには多くの方からご助力を頂戴してきた。まず、他の国を研究する基礎として、日本の状況を理解しようとした。そのためにさまざまな機関、企業、人をお訪ねし、多くのことをご教授いただいた。お訪ねした順にお名前をあげると、財団法人静岡総合研究機構、株式会社スペースクリエイション、株式会社サイエンテックス、浜松ホトニクス株式会社、財団法人しずおか産業創造機構、柴田義文氏（三遠南信バイタライゼーション）、はましんキャピタル株式会社、静岡大学イノベーション共同研究センター、千葉県庁商工労働部経済政策課、千葉県産業支援技術研究所、財団法人千葉県産業振興センターである。これらの方々からいただいたご厚意とご協力に心より感謝申し上げたい。

また、講師をお招きし、お話をうかがうことは、通常の研究会以上に重要な活動となった。講師のお話を通して、自らのポジションを確認し、取り組むべき課題を明確にしていくことができたのである。ご多忙のなか、周到な準備のうえに示唆に富むお話をしていただいた吉岡英美（熊本大学）、前田裕子（神戸大学）、田路則子（法政大学）、植田浩史（慶應義塾大学）、平野真（高知工科大学）の各氏には深く感謝している。

そして、わたしたち研究会メンバー4名にとって、とりわけ大きな支えとなったのはオブザーバーたちとのディスカッションである。ぼんやりとしたゴールを4人で目指すのはいささか心許ない。そこで、研究会の議論において、当研究所所属のオブザーバーには通常以上に積極的に発言を求め、研究の進路を定めることを助けてもらった。川上桃子、町北朋洋、明日山陽子（以上、新領域研究センター）、太田仁志（在デリー海外派遣員）の4名のおか

けで活発な議論ができたことは、本当にありがたく思っている。

もちろん、メンバー4名それぞれの研究活動も、多くの方たちのご支援に支えられてきた。なかでも、それぞれの研究対象国での調査においてご助力をいただいた方たちの数は計り知れない。個々のお名前をあげる紙幅がないことは残念だが、深い感謝を表したい。

最後になったが、研究成果の審査過程で貴重なコメントを頂戴した査読者の方々、本として作成する段階で骨を折ってくださった編集部門の方々に、厚くお礼を申し上げたい。

2010年秋

編者